様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　５月１６日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号： 20530485
研究課題名（和文）ポピュラー・カルチャーにおける「戦争」とジェンダーに関する文化社会学的研究
研究課題名（英文）A sociological study about ‘war’ and gender in popular culture
研究代表者
高井　昌吏（TAKAI MASASHI）
早稲田大学・スポーツ科学学術院・講師
研究者番号：20425101

研究成果の概要（和文）：ポピュラー・カルチャーのなかで形成される戦争の表象を、ジェンダーの視点から考察した。たとえば、男らしい戦争イメージの形成では、『男たちの大和』『連合艦隊』などの映画、さらに「大和ミュージアム」や知覧という観光、あるいはプラモデルなどが大きく絡んでいる。女らしさやこどもらしさについては、むしろ『ガラスのうさぎ』『火垂るの墓』などの児童書・アニメの影響が大きい。こうした点を考慮し、それぞれの戦争（沖縄戦、原爆、空襲など）が社会的に受容されるうえで主に寄与したポピュラー・カルチャーに着目し、それらを横断しながら構築される戦争イメージについて分析した。

研究成果の概要（英文）：We studied representation of the war that was made as an image in popular culture, from a viewpoint of the gender. For example, a many war images are made by some movies (“OTOKOTATINOYAMATO” or “RENGOKANTAI” etc) and tourism (CHIRAN or “YAMATO-MUSEUM” etc), or a lot of plastic models. Femininity or childishness is related with children's books or cartoon film works (“HOTARUNOHAKA” or “GARASUNOUSAGI” etc). Each war (Okinawa war, an atom bomb or an air raid, etc) were accepted in society by many kinds of media. Having taken the above into account, we paid attention to popular culture which spread representation of the war. Furthermore, we clarified a war image constructed transversely by media.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード: 戦争、ジェンダー、ポピュラー･カルチャー

１．研究開始当初の背景

(1)ジャーナリズムや論壇では、これまで多くの知識人がアジア・太平洋戦争、あるいはヨーロッパ戦線なども含めた第二次世界大戦について語り、自身の見解を述べ、ときには論争を重ねてきた。先の戦争をどのように意味づけるか、あるいは反戦、平和、基地問題などについて、様々な議論が展開されてきた。また、アカデミズムにおいても、知識人やジャーナリズムの言説を分析したり、あるいは原爆や沖縄戦、「戦争の記憶」などに特化した研究が蓄積されてきた。先の戦争について考えること、あるいは戦後いかなる議論が展開されてきたのかに注目することは、思想あるいは学問という分野に大きく寄与するものである。

(2) 一方で、戦争の記憶は、映画やマンガなど、大衆の娯楽的メディアによっても広く語り継がれてきた。いわゆるポピュラー・カルチャーのなかで、戦争の記憶は語られ続けてきたのである。例えば、小説やマンガ、戦争映画、全国に多々ある戦跡関連の資料館、あるいはそれを目的地とする戦跡ツーリズムなどが典型的だろう。そもそも、人々にとってポピュラー・カルチャーが身近で娯楽的であるのに対して、戦争というものには常に重いイメージがつきまとう。戦争を考える上で笑ったりあくびをしたりすることは不謹慎であり、そのような感覚は多くの人々に共有されているだろう。それにもかかわらず、戦争はポピュラー・カルチャーのなかで消費され続けてきた。重いテーマでありながらも、人々は戦争映画やマンガを読み、感動や悲哀を感じてきた。さらにいうならば、あるときはそれに魅惑され、楽しみすら見いだしてきたのだ。すなわち、厳粛な主題でありながらも、娯楽や慰安のなかに組み込まれ続けてきたのである。

２．研究の目的

(1) 上記のように、戦争とはきわめて両義的なテーマである。ならば、はたして「(戦時の）事実」や知識人の言論（あるいはそれを対象にした研究）だけで、人々の戦争観を考えることができるのだろうか。むしろ、それらがどう「楽しまれてきたのか」ということにも、目を向けるべきではないだろうか。そうした観点に立ち、本書では映画・アニメ・マンガなど人々にとって身近なメディア、いわゆるポピュラー・カルチャーを対象にして分析を進める。そこで明らかになるのは、思想や学問における戦争観というよりも、むしろ「日常生活を生きる人々の戦争観」なのである。

(2) 近年、戦争の語りを戦後史の文脈のなかから批判的に捉え返そうとする研究が進展している。佐藤卓己『八月十五日の神話』(筑摩書房・2005 年)、小熊英二『<民主>と<愛国>』（新曜社・2002 年)、福間良明『「反戦」のメディア史』（世界思想社・2006 年）などが、その代表的なものであろう。だが、戦争の語りを戦後日本のナショナリティとの関わりから分析する研究が量産される一方で、そこにジェンダーの問題がどのように関与しているのかを検証したものは少ない。戦争映画にせよ戦争を扱ったマンガにせよ、観衆・読者はそこでの戦争の語りをナショナリティの面から消費しているだけではなく、多くの場合、そこに描かれるジェンダー表象をも消費している。読者にとって、スクリーンや誌面に見ていたのは、戦場に赴く者だけの物語ではなく、彼を取り巻く家族関係や恋愛関係でもあったはずである。とくに娯楽として消費されるポピュラー・カルチャーの場合、そうした傾向が顕著であった。にもかかわらず、これまで、戦争の語りとジェンダーの問題の関わりに切り込まれるものは少なかった。
もっとも、戦時下におけるメディア表象とジェンダーの関連性については、すでに重厚な研究も生み出されている。若桑みどり『戦争がつくる女性像』（1995 年）を嚆矢とし、上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー』（1998 年)、川村邦光『セクシュアリティの近代』（1996 年)、早川紀代編『軍国の女たち』（2005 年）のほか、広告・婦人雑誌を取り扱った石田あゆう『近代日本における女性と消費文化の歴史社会学』（京都大学博士論文・2004 年)、同「広告メディアとしての戦時期婦人雑誌」(津金沢聡広・佐藤卓己編『広報・広告・プロパガンダ』）などがある。だが、戦後の戦争の記憶とジェンダーの関わりを主たる分析対象としたものは少ない。この分野では、若桑みどり「ジェンダーで読み解く戦後映画」『東西南北（和光大学総合文化研究所年報)』（2007 年）が数少ない先駆的な先行研究であるが、やはり個別論文の制約もあり、「原爆」「沖縄戦」「特攻」など、い

かなる戦争を語るなかで、いかなるジェンダー・ポリティクスが絡んでいるのかという点までは扱われていない。本家印級でありからにするのは、まさしく戦争の語りに潜んだジェンダー・ポリティクスである。

(3) これまで戦争の語りとツーリズムとの関係性については十分に論じられてこなかった。山口誠『グアムと日本人―戦争を埋め立てた楽園』(岩波新書・2007 年)が、その数少ない重要な研究である。大衆文化における戦争の語りを考える上では、戦争の語りとツーリズムの関係、関連記念館の成り立ちなどは、検証すべき問題である。本研究では、映画・アニメ・マンガといったメディアに加え、ツーリズムをも戦争の記憶の「メディア＝媒介」として捉える。ポピュラー・カルチャーにおける戦争の語りを、ジェンダーという機軸を中心にしつつ、多面的に考察する。

３．研究の方法

(1)そもそも、各々のメディアにおける戦争の語りは、決して個々が独立して存在しているわけではない。あるときは、マンガの作品が映画化されることもあるし、またあるときは小説やアニメがツーリズムと分かちがたく結びつくこともあるだろう。あるいは、複数のメディアがそれぞれ影響しあい、相互依存的な関係を構築しているのかもしれない。いずれにしても、戦争の語りは「多様な」メディアを通して、各々が互いに関係性を保ちつつ、あるいは独自性を維持しつつ、ある社会背景のもので成立しているのだ。

(2)したがって、まずは映画・観光パンフレット、小説、マンガ、テレビドラマ、あるいはそれらに関する論評などを広く収集する。さらに、沖縄・広島などの戦跡観光地、あるいは戦争・平和に関係した資料館で実地調査を行い、戦跡ツーリズムの実態を調査する。同時にポピュラー・カルチャーとしての戦跡観光について考える。
なお、本研究では上記テクストにおけるジェンダー表象とともに、オーディエンスがそれらをどのように受容したのかについても、可能な限り検証を行う。そのためには、映画雑誌・テレビ研究誌や新聞での批評にあたるほか、マンガ雑誌を発行する出版社で保存されている読者アンケート、記念館における来館者の感想ノートを閲覧する。もちろん、ジェンダーという視点を意識しつつ、資料収集・調査を行うことは言うまでもない。

４．研究成果

(1)一口に「戦争」と言っても、その内実、表象、体験は多岐にわたる。「銃後」の記憶は、空襲や疎開、あるいは実際の地上戦に巻き込まれた沖縄など、それぞれまったく異なる。戦場にしても同様に、どの戦線を、どの時期に、どのような身分、年齢で体験したのかによって違うし、その描かれ方も多様である。これらの様々な戦争の側面を、メディア、ポピュラー・カルチャーを通してできるかぎり包括的に議論した。

(2)ジェンダー的視点から研究を大きく二分類にしてまとめた。第一に、銃後生活（女性中心）を連想させるような作品、メディア表象に注目した。『ひめゆりの塔』、『二十四の瞳』、『夕凪の街 桜の国』、『ガラスのうさぎ』などを事例として、女性や子どもを主人公とした戦争作品がどのように表象され、大衆に消費されていったのかを分析した。さらに、それらが小説・映画・マンガからアニメやツーリズムへと、いかにして他のメディアへと接合されていったのかを明らかにした。

(3)分析の結果、戦争被害者としての女性イメージの変容が具体的に検証された。例えば、映画『ひめゆりの塔』(1953 年）から沖縄返還、「沖縄平和資料館」や「ひめゆり平和祈念資料館」(1989 年）など、時代やメディアの変容を経て、沖縄・女性という表象がどのように変化し、本土の人々からどのように消費されていったのかが明らかになった。そのほかにも、「日本の母」「反戦平和の象徴」としての壺井栄イメージの形成、および小豆島観光ツアーへの接合の力学、あるいは『夕凪の街 桜の国』に現れる被爆少女の表象、マンガからアニメへとトランスメディアをへてその表象が変容していくプロセスを浮き彫りにした。

(4)次に、逆にヒロイズムへの共感や戦闘への好奇を示すテーマに焦点を当てた。「戦艦大和」、プラモデル、山本五十六、あるいは少女マンガに潜む好戦性などに注目し、「好戦」を表現する「モノ」や人物を通して、その意味付けや消費のされ方の変遷などを浮き彫りにした。例えば、プラモデルに潜む「戦争の知識」が「反戦・平和・人の死」といった一般的な戦争の知識とは一線を画した「戦争の教養」となっていったプロセスを検証した。さらに、戦艦ヤマトをテーマにした映画の中に見出される「男同士の絆」について明らかにし、それが大和ミュージアムへと接合されるプロセスを追った。また、一見「好戦」とはかけ離れているかのように思える少女マンガの戦争物語に注目し、そこにかくされた好戦性を詳細に議論した。

(5)全体として、メディアを横断する戦争の描

かれ方を追い、「反戦」「好戦」をめぐるメディア表象を比較しつつ、ポピュラー・カルチャーのなかで「戦争」イメージが構築されるプロセスや、個々の戦争を語る言説・表象のあいだにいかなるズレがみられるかについて分析を行った。そのような言説・表象が現れた社会背景をも考慮に入れ、総合的に議論した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
①福間良明、「「継承」という「断絶」」、『新潮』106-7、査読無し、2009、244-245

②石田あゆう、「若い女性」雑誌にみる戦時と戦後―『新女苑』を中心として（特集 昭和の記憶とメディア）、マス・コミュニケーション研究』 76、査読なし、2010、69-83

〔図書〕（計２件）

①高井昌吏・谷本奈穂編、村瀬敬子、石田あゆう、坂田謙司、福間良明、メディア文化を社会学する～歴史・ジェンダー・ナショナリティ～、世界思想社、2009、294

②高井昌吏編、村瀬敬子、石田あゆう、谷本奈穂、坂田謙司、福間良明、反戦と好戦のポピュラー・カルチャー～メディア・ジェンダー・ツーリズム～、人文書院、2011、頁は未定（2011 年 8 月に人文書院より、研究代用者および分担者全員の共著・研究成果として発刊する。初校はすでに脱稿済み）

６．研究組織

(1)研究代表者
高井　昌吏（TAKAI MASASHI）
早稲田大学・スポーツ科学学術院・講師
研究者番号：20425101

(2)研究分担者
谷本　奈穂（TANIMOTO NAHO）
関西大学・総合情報学部・准教授
研究者番号：90351494

石田　あゆう（ISHIDA AYUU）
桃山学院大学・社会学部・准教授
研究者番号：70411296

坂田　謙司（SAKATA KENJI）
立命館大学・産業社会学部・教授
研究者番号：70388081

福間　良明（FUKUMA YOSIAKI）
立命館大学・産業社会学部・准教授
研究者番号：70380144

村瀬　敬子（MURASE KEIKO）
佛教大学・社会学部・准教授
研究者番号：20312134